Gender Identity の初期形成についての理論的検討

—— 臨床的見地から ——

久 野 晶 子

A Theoretical Study of the Nascent Phase of Gender Identity Formation

—— From Clinical Standpoint ——

KUNO Akiko

はじめに

かつて、性差はすべて生得的なものであると考えられていた時代があり、そしてそれはフェミニズム運動の台頭とともに否定されていった。そもそも、gender 研究の出発点もそこにあり、女性の一般的性質と言われるものが、いかに社会化の過程において形成されていくか、どれだけ文化によって異なるものか、いかに近代化によって人工的に設定されてきたのかが明らかにされていった。「アメリカにおけるウーマン・リブの運動が、最初は、女性も男性と同等に活動できることを強く主張するという方向に打ち出されていた」。しかし、近年、その運動そのものも「むしろ、女性の本質をしっかりと見つめ、男性原理優位の欧米社会の一面性を反省し、それを弾力的に変革していくために、本来的な女性のあり方を捉え直そうとする方向に向かってきている」（河合、1985）。心理学における性に関する研究も、性差として現れてくるものの殆どが社会化の過程によるものであることは十分に理解した上で、さらに、男女それぞれの自己実現につながるような、女性、男性独自のあり方を考えていくことが求められる段階に来ていると思われる。

gender identity とは、gender の中でも、個人が自分自身の性別について持っている心理的な概念を指す。性差について心理学的に考察するにあたっては、gender identity がどのように形成されてゆくか、その形成過程そのものが男女においてどのように異なった内容を持つかを、詳細に検討することが有効であろう。

心理臨床において、心の病理のあり方やその表現型は、男女において必ずしも同じでない様相を呈する。近年、増加している境界例、摂食障害には圧倒的に女性が多い。そしてそれは gender identity の問題と関わりが深く、gender identity 形成が発達早期の母子関係にまで遡って問われる必要があるであろう。母子関係は女性にとってのみならず男性にとっても重要であることには変わりないが、男性の identity 形成に関しては、母親との関係に問題があったとしても、父親との関係がその修復を可能にするようなことが期待される面がある。

gender identity 形成をめぐる、臨床的立場からどのような検討が可能であろうか。本稿で

は臨床心理学的理解に基づいて、gender identity の形成過程の理論的な整理を試みることを目的とする。さらに、境界線を再接近期に大きな課題を残すものとして捉え、女性における再接近期的な gender identity 形成の問題に特に焦点を合わせながら理論的吟味を試みたい。

I Gender Identity の形成過程

1. gender identity という概念

人はいつどのようにして自分が「男である」「女である」という認識を持つのか。その認識はどのようなプロセスによって成立するのか。変更・訂正は可能か。どんな要因によってそのプロセスは影響を受けるのか？ この概念は、精神分析医であった Stoller によって gender identity と名付けられた。Stoller は、半陰陽者の研究から男性性・女性性の分化が心理社会的に決定されるものであることを発見した Money とともに、半陰陽者の精神分析的発達研究から Freud の古典的な精神性愛発達理論を検証批判し、sex から独立した gender の領域を発見するに至った。

小此木ら (1981) によれば、gender identity とは「個人が自分の性別・性差 (男性-女性 male-female, 男であること-女であること maleness-femaleness, 男らしさ-女らしさ masculine-feminine) について抱く、すべての感覚、認知、空想、心証、そして実際の言動、さらには文化的・社会的価値観から規範までをも、そのうちに含み成り立っている」とものと定義されている。すなわち、それは「自己認識の総合の所産」であり、自我同一性と密接に結びついているものである。さらに小此木らはこれを以下の3つの構成要素を、機能的側面としてと同時に発生-発達の側面として整理している。①中核性別同一性 (core gender identity): 自分が男性であるか、女性であるかについての確固とした自己認知と基本的確信。性別同一性の中核であり、生物学的性に最も密着した原初的自己表象とでもいうべきもの。発達の極めて早期に形成されてしまい、一度それが形成されてしまうと、その個人の一生を通して変化することのない不変で不動の自己定義。②性別役割 (gender role): 社会的・文化的なレベルでの男性役割-女性役割 masculine role-feminine role, すなわち社会的性差 social sex-role を引き受け、習得し、実行していく能力。性同一性の中で最も社会的、可塑的な側面。③性対象選択 (sexual partner orientation): 「性的な関心、興味、欲望を異性に向け、また性交渉の対象に異性を選択する能力」。思春期から青年期にかけて性同一性の重要な側面として顕在化していく。

すなわちここでは非常に原初的なレベルの中核性別同一性のごく早期に成立し、それとあいまって性別役割が取り入れられていくと考えられている。¹⁾ そもそも中核性別同一性とは、出生後 18 カ月ごろにはすでに幼児の行動に性差の分化がはっきり観察できること、そして 2, 3 歳においては、幼児の心の中に「自分は男の子だ」「私は女の子です」という自覚が十分に確立されているという観察的、臨床的な事実から Stoller の提唱した概念である。この 1 歳半から 3 歳前後までの時期に gender identity が生まれてくると考えるのである。

中核性別同一性は臨界期という概念を用いて説明される。すなわち、半陰陽の子どもの場合、性の命名には刷り込み効果があって、18 カ月までに訂正されないとそれを後になって訂正することは不可能となる。すなわち、18 カ月までに、言語化はまだされないレベルではあるが、確実に片方の性別としての自己認識が形成されていると考えられる。

2. 心理学分野における性に関する実証研究

心理学における性に関する研究は、性度²⁾、性役割に関するものが中心で、広い意味での gender identity に関するものは殆ど見当たらない。また性役割に関する研究は数多くなされてきているが、殆ど 4, 5 歳、はやくても 3 歳以降を対象としたものである。それはもともと性差の認識は 3 歳以降であるとの考え方が中心であったため、3 歳以降における性役割の習得過程のメカニズムの議論が盛んになされてきた。³⁾

性差の認識が 3 歳以降であり、性役割が幼児期後期において初めて習得されてゆく過程であると考えられたのはなぜか。それは行動観察や性度課題において、幼児期後期の子どもが、両性への志向をともに多く含んだ反応を示したためであった。男女の反応の違いが明確で、安定していた児童期以降と比べて、幼児期では明らかに自分の性別に合った反応を示した割合が低かった。この事実から認知発達理論のコールバーグは、性別恒常性という概念を導入し、知能面での恒常性の獲得と時期を同じくして、性別が不変であるという概念を獲得できて初めて、自己の性別カテゴリに合わせて性役割を正しく取り入れていけるようになると考えた。性別カテゴリ理解が成立し、その上で役割が取り入れられていくと考えた所は Stoller らと同じであるが、その性別カテゴリ理解は中核性別同一性と比べるとかなり高度なレベルが想定されているといえる。⁴⁾

さて、多くの観察、研究から、性別の自己命名ができる前の 1～3 歳の幼児期前期でも様々な性差がみられることが示されている（南, 1977）が、これまで認知発達理論においては、これらは性差意識—性別カテゴリ理解が形成される前のものと考えられていたため、主体的な性役割行動によるものではなく、生物学的要因などによるものと考えられていた。

しかし、Lewis ら（1975）による実験は、性役割の主体的な取り入れに関して新たな事実を示した。生後 12 カ月の乳児に、同年齢の男女の乳児のスライドを提示したところ、被験乳児は同性のスライドの方をより多く注視したのである。さらに Bower ら（1989）が重ねた実験では、乳児は大人には区別のつかない、動きのみを抽出したフィルムでも正確に性別を見分けた。自分と同性の方を常に多く注視するという事は、性別カテゴリの区別をしているということだけでなく、自分がその一方と同じである（自分みたい）という、同一感覚をも（身体感覚のレベルから）既に持っていることを示していると考えられる（柏木, 1983）。同じく Bower ら（1989）の実験では、生後 8 週の乳児においてすでに笑顔に男女差が形成されていることが示された。非常に早期からの性別化された取り扱われ方によって子どもは性規定を受けてきていると考えられる。その中で、性別カテゴリの片方に自分が属するのだという感覚は、生後 12 カ月時には既に存在していることが示されたと考えられる。

それではそのように明確に性役割を取り入れていた乳児が、3 歳以降での性度課題で両性への志向を示すようになっていたのはなぜだろうか？ その間の時期に何が起こるのか。その時期は子どもの発達全体においてどんな時期なのか。1-2 歳児における gender identity 形成の過程を吟味してゆく必要がある。

3. 1-2 歳児の発達

A. 分離・個体化過程

1-2 歳にかけての発達は、自己の誕生というテーマに沿って進んでゆくと言えよう。「漠然と

した自他未分化な世界に住んでいた乳児に、やがて“自分”と他との区分が少しずつ芽生えてゆく。最初の“自己”は、自分という身体部分が、外界から区分した存在だということを知ることにはじまる」(柏木, 1983)。また Allport (1961) は、乳児においては自己が外界から分離されておらず、従って自己意識ももたないが、外界が区別されるにしたがって、自己も意識されるようになる。そしてその過程は生後2年目に急速に進行すると述べている。

Mahler ら (1975) は子どもが自他未分化な状態から個体として心理的に誕生するに至る過程を、分離・個体化過程 separation-individuation process として綿密に記述している。それは母親との正常な共生段階から、分化期、練習期、再接近期、個性の確立と情緒の対象恒常性の始まりへと、生後5カ月頃から2歳半までかけて進行するとされる。1-2歳児はこのうち練習期後半から再接近期にかけての時期に当たる。練習期は直立歩行能力の獲得に始まり、母親の膝から離れて世界を探索にでかけてゆく時期である。再接近期は、完全に身体的に分化して活動できるようになった子どもが、それゆえに分離の不安にさいなまれ、心理的にも情緒的恒常性を獲得して一人で機能できるようになるまで、再び母に接近して、共生時代とはまた違った別々の個体同士としての緊密な情緒的交流を求めにやってくる時期である。

再接近期は、15～18カ月の初期再接近期、18～24カ月の再接近期危機、21カ月以降のこの危機を個人的に解決する時期の3期に区分されている。初期再接近期は、喜びを共有する相手として母親を発見することに特徴づけられる。世界を探索してきた成果を母親と共有する。しかし母親が自分とは別であること、分離を認識することで、子どもはまた「母親との共生的一体感に支えられた万能的自己感覚から、限られた現実能力の持ち主としての分離した個体感覚へと、自己価値の転換がここで迫られる」(齋藤, 1993)。母親に緊密な情緒的交流を求めるが、母親もそれを完全に満たすことはできない。「分離意識に伴う分離不安・愛情喪失の不安が個体化に向けての自律能力の開拓・達成という指向性と相剋関係に陥る」(齋藤, 1993)。これが再接近期危機と呼ばれる葛藤と苦闘にみちた過程である。21カ月頃に母親との最適距離をなんとか発見することで、この苦闘は全般的に減少する。

B. 再接近期危機性差と gender identity の初期形成

このように再接近期の課題は、最初の対象であった母親から、情緒的にも満たされた分離をなすことである。しかし、そこで体験される過程の内容は、その母親が同性であるか異性であるかによって異なってくる。Mahler も「分離した個体になるという課題は男の子にとってよりも女の子にとって一般的により困難である」ことを示唆している。

男児において、分離の課題が比較的容易であるとされるのは、練習期のような外界の事物探索が生物学的要素としての男児の身体活動性の高さによって延長されやすいこと、また母親によっても「外界探索や物的現実世界の支配を男児的特徴として認め許容」されやすいことによる。男児としての gender identity の成立は、母親との差異の発見であり、男児は母親から遠心の方向をとりますます分離へ向かうことになる。男児にとっての gender identity の不安は、脱同一化した母親に再び呑みこまれることへの恐怖として潜在する。

安定した分離をなすことがこの過程の課題であることは女兒にとってもかわらないが、女兒にとってその分離の対象の母親が同性であるために分離の意識は強い不安をもたらす。「母親と自分とが別々であるという意識は、男児とは逆に、早期の gender identity 形成に逆らうものであ

る」(齋藤, 1993)。女兒は行動世界が拡大していたところから, U ターンして母親の元に戻る。「性差を発見して, 女の子は母親のもとに帰り, 母親を非難し, 母親に要求し, 母親に失望し, にもかかわらず, 両面的に母親にむすびつけられる」(Mahler, 1975) ため, 十分に次の段階に向かって機能してゆくこと, すなわち, 分離の課題を達成することが困難になる。

このように, まさに分離・個体化がなされるときに, 「互いに不可分に絡み合った関係」(齋藤, 1993) として gender identity の新生段階 (中核性別同一性) が形成される。その分離・個体化過程の意味そのものが男女で異なり, 従って gender identity の形成過程も男女にとって異なる意味を持つものになる。

4. 自己の客観視の成立

このように分離・個体化の過程と互いに不可分に絡み合った関係として gender identity が形成されるとき, その分離・個体化の過程の中で生じる自己の質的な変化によって, その形成過程そのものが影響を受けることは当然考えられる。

A. 鏡像の自己認知

鏡像に対する乳幼児の反応は, ワロンが自己の身体を意識し個別化していく過程において取り上げて考察したように, 自己認識の始まりを示す現象として興味深い研究が重ねられている。自己の存在を発見しているか否か, 身体的な自己をそれと認知しているかを, 鏡像に対する反応から読みとることができる。自己の鏡像を自分自身の映り姿であると理解できるようになることを鏡像の自己認知という。これは, 漠然とした他者であったものを, まぎれもない, “他ならぬ自己” として引き受けるということである。鏡像の自己認知は 15～24 カ月の間に可能になり, 自己認識の第一歩, 自己を客観視できるようになること, すなわち自己の身体図式の形成の度合いを示す指標とされる (百合本, 1981)。

自分自身の身体のみが独立して機能するようになるという点から見て, 鏡像の自己認知の成立は, 分離・個体化過程の段階の質を変えるものであると考えられる。このようにして確立されていく自己認知, 自己認識は, 自己意識の構成要素となる。自己という意識をどのような色合いを帯びた範囲と区切りでもって抱くか, それは自他間の境界をどのように体験し形成するかということに深く関わっていると考えられる (生野, 1994)。

B. 自己の客観化と中核性別同一性成立との関連

Stern (1985) は, 生後 15 ヶ月～18 ヶ月からの時期を, 彼の自己感の発達理論の中で言語的自己感の時期と位置づけ, この年齢で子どもが自分自身を客観視するようになるとし, その証拠として鏡像の自己認知, 自己を表現する言語ラベル (名前や代名詞) の使用, 自己の客観的類別化である中核性別同一性, 共感行為をあげている。「性同一性が確立し始めるのもほぼこの時期です。乳児は客観的存在としての自己が, 他の客観的存在である男の子か女の子かの子のいずれかに分類されることに気づくのです。」

一つの目に見えるまとまりである身体を持つ自己として分離・個体化の過程が進行していくと, 乳児期の頃のような単に選択的な情報処理として性別化された情報を取り込んでいくのではなく, “他ならぬ自己” に属するものとしてその性質を引き受けてゆかねばならなくなる。すなわち中核性別同一性が確立するとは, 自己の客観的類別化が成立することを意味すると考えられる。

これが生後12カ月から3歳までの間に起こる。ところでこの期間は、前述したように、12カ月時には安定していた性役割志向の示され方の混乱が生じてきた期間でもある。

従って、自己表象としてgenderを取り入れるようになることで、心理的問題によって、混乱が行動上示されるようになったと考え、この混乱の訳を理解することができるのではないだろうか。つまり、乳児は分離・個体化してゆく過程において、自他境界を構成する、自己認知の一部としてgender identity（の内の中核性別同一性）を取り入れる。すると、母親との関係においてのgenderの（一方への）価値づけを持った性格が“他ならぬ自己”に張り付けられるため、心理的側面においてそれに対する葛藤が生ずる。そのため、例えば性役割テスト場面において両性への志向を同時に示すなどの、行動上に混乱が示されることになる。

今回検討してきたように、gender identityの初期形成の過程が、認知的な能力だけでなく、自己の誕生の、存在のあり方そのもの、さらに自他境界の形成のされ方そのものにも関わる、心理的な意味、方向付けを持つものであるからこそ、genderに関わる行動の理解にはその内面を汲み取ろうとする姿勢が欠かせないと思われる。今後、臨床心理学的立場からgender identity形成過程において乳幼児の内面で起こっていることを理解しようとしてゆく場合には、行動上示される「混乱」という現象に積極的な意味を見いだしていくことが有効であろう。⁵⁾

II Gender Identityをめぐる病理の臨床的理解

1. 境界例と分離・個体化過程

境界例の病因として、早期からの発達の要因が関与していることは、精神分析理論においては広く前提とされてきている。その中でもMahlerは、後の重篤な人格障害、境界例の病因として、胎外生活のきわめて初期の段階—最初の14-15ヵ月、すなわち再接近期に至るまで—の発達が妨げられた結果、再接近期（15ヵ月以降）で達成されるものと期待される構造化過程が阻害されることを想定している。⁶⁾そして「再接近期危機において見られる二つの機制—強制 coercion と対象世界の分裂は、もし度が過ぎたものであれば、成人のほとんどの境界例患者の感情転移に特徴的に見られるものと同じである」と述べている。そして境界例論の基本的な理論付けを行っているKernbergとMastersonはともにMahler理論に基づいて、境界例となる人々は、その幼児期の分離・個体化の発達過程で、再接近期に強い固着を生じていて、特に思春期のいわゆる親離れが始まるとともに、再接近期の固着に退行して、境界例を発症するという基本的な図式を提示した。これはそれ以降の境界例の共通理解として広く受け入れられていると言える。再接近期危機の状態を繰り返す、そういう固着が心にできあがってしまっている人物が境界例なのだというのが、MastersonやKernbergなどの考えの一つの基本的な視点になっている（小此木、1990）。

また、摂食障害の多くは、境界例水準の人格構造を持つことが指摘されてきているが、摂食障害の病因として、早期の母子関係に言及した論文も多い。その代表として、Bruch（1978）は、患者の乳幼児期の発達に関して、すなわち分離・個体化してゆく過程において「空腹を訴える子どもに対して母親が適切に反応しない場合、子どもは空腹感などの身体刺激やその認知的解釈が障害され」、その結果、自己概念・自己評価の発達が歪められ、身体像の障害等の摂食障害に特有の病理が形成されるとし、摂食障害に早期からの発達の要因が関与していることを示唆している。

さらに、Sugarman (1982) らは、Anorexia Nervosa の発症機序を Mahler の分離・個体化理論に基づいて考察している。すなわち、Anorexia 患者は、練習期で発達が滞っている。それは Anorexia の家族が、自他の境界が曖昧で、子どもが「練習」し、自立していくことを好まないからであり、自我境界を守る唯一の方法として症状が選択されると言うのである。

2. 女性と境界例

このように、境界例、摂食障害の病因として、早期の母子関係における発達の問題が関係していること、それも分離・個体化の段階（特に再接近期）に固着点があることが指摘されてきた。しかし、それではなぜその分離・個体化の時期に問題が起こり、そこに大きな課題を残すことになるのか？ そしてその病態はなぜ女性に多いのか？ これについては殆ど説明されてきていない。

A. 再接近期危機性差と境界例

筆者は、これは再接近期危機性差、すなわち再接近期の課題が男児に比べて女児にとってより困難であることに関係しているのではないかと考える。

先に見てきたように、境界例とは、再接近期の課題に大きな問題を残し、思春期・青年期になってそれに取り組まざるをえなくなって起こる状況であると考えられる。すると、gender identity 形成を考えると、女児の方が母子関係に縛られやすく、再接近期の課題にとらわれやすいため、再接近期の課題がやり残されたままになる割合も女性に高くなると考えられる。そのために、摂食障害や、境界例レベルの問題を示すことが女性に多くなりやすいのではないだろうか。

女児の再接近期危機における困難は、母親との関係に非常にアンビバレントに結びつけられるストラグルにある。Mahler の描写する再接近期危機における女児のありよう——「性差を発見して、女の子は母親のもとに帰り、母親を非難し、母親に要求し、母親に失望し、にもかかわらず、両価的に母親にむすびつけられる」——は、まさに、摂食障害における母娘関係をあらわす事態と重なって感じられる。斎藤 (1990) も「両価的拘束関係や、自己愛や全能性に覆われた関係、呑み込み相手を破壊してしまう質の関係、敵対的同一視によって相互に呪縛しあう関係、未分化な共生関係や“しがみつき”の関係——(中略)——数々の摂食障害や心身症、また境界例など人格障害を示す女性の事例においても、こうした「関係」基盤のあり方が問われないですむ場合は稀である」としている。そういった「関係」基盤のあり方が常に問われ続けていくこと——ただの「分離」でもなく、しかし「関係」に埋没してしまうこともなく——これは女性がライフサイクルを通じて「自己」を形成していく道のりの抱える根本的な課題と言えるだろう。

B. 自他境界の障害としての境界例

自己意識が自他境界の形成と関係が深いことは前にも述べた。自己意識は様々な要素から構成されるが、性別自己の意識はその最初の一つであると言われる。鏡の中に自己を発見したとき、自己意識が生まれる。その自己意識は、他とは違う他ならぬ自分という区分を産む。そしてその区分——自他の境界——がどのような性質のものとして誕生させられるか、それはどのように自己認識が誕生したか、どのように性別の自己認識を体験したかに影響を受ける部分が少なくないと考えられる。

分離・個体化の過程に大きな課題を残したままであると、思春期—青年期により自立した自己

となることを求められるとき、自立を巡る課題が取り上げられ、それは自他境界を確立しようとする苦闘となる。そこで、自分なりの自己、自我境界を求める、分離への旅立ちとして、再接近期的な課題が前景化し、そしてそれがなかなか叶えられない場合、母親との間に再接近期危機の様相を呈することになる。つまり、思春期の摂食障害等の症状は、なんらかの形で母親からの分離をなんとかなしとげようとするときの、「自我境界を守る唯一の方法」であり、苦闘であると理解される。

この区分を作ることが、女兒の方がより困難なのではないだろうか。Bruch は摂食障害において身体イメージが障害されているという指摘をしている。また Chodorow (1978) も「母-娘は互いを別人格として経験しにくく、それゆえ女性は一次同一化の感情を持ちやすく、自我、および身体境界の混乱に陥りやすい」と述べている。自他の境界の障害があるからこそ、摂食障害、境界例が、女性に多く起こってくると考えることもできよう。

自己は自他の境界、自我境界とともに生まれてくる。その生まれてくる仕方での自己の性質が決まる。しかしそもそも、分離・個体化の過程が男女によって異なるのだ。自他の境界のあり方、そして自己のあり方を考えるときも、女性にとっては単純に男性と同じようにはいかないのではないだろうか。摂食障害や境界例の治療目標モデルとしても、女性独自の「自己」の存在様式というものを考えていく必要があると思われる。

Ⅲ ま と め

今回の理論的検討によって、gender identity 形成過程そのものが分離・個体化過程そのものと同時に進んでくること、gender identity の初期形成は母子関係との絡みで男女両方進むが、その母子関係がどのような形で gender identity に男女それぞれにおいて作用するか、その中身が違うこと、その違いが自己として生まれてくるものの性質にも深く影響を及ぼしていることが理解された。そしてそれは境界例、摂食障害の病理の発現にも深く関わってきている。

再接近期において gender identity を巡って取り組まれるその過程は、そういった病理の治療において取り組まれる課題とまさに重なってくるし、そこでどのような治療過程がイメージされるべきかは、再接近期を越えてどのように自己を形成してゆくかという過程に重なってくると思われる。その過程に大きな影響を与えるものとして、gender identity の初期形成という視点は、臨床心理学的に重要な意義を持つと考えられる。

注

- 1) 性役割についての研究が中心である心理学における実証研究では、gender identity という用語は、性役割の側面を表すものとして扱われることが多いが、本論文では、精神分析学的立場をとり、gender identity を広くとらえ、その全体過程の一部として性役割習得の過程があると考えて論を進める。
- 2) 適切な性役割の取り入れ度を意味する用語。
- 3) 同一視理論、社会学習理論、認知発達理論がある。
- 4) コールバーグはその時期を具体的操作期に入る6～7歳以降であるとしていたが、それ以降の研究によって必ずしもそれほど遅くないこと、また性別恒常性にも階層構造があって、まず性の自己命

名が3歳で可能になり、次に性別安定性、最後に性別恒常性の順に獲得されることが指摘されている。

- 5) 久野(1996)では、性別役割選考推測課題を作成し、1-2歳児30名に実施した。一貫して片方の性別志向を示せたか、混乱した反応であったかが区別され、後者も「混乱」というカテゴリーとしてデータ化する。結果は、17ヶ月児では性別に適合した一貫選択が多かったのが、鏡像の自己認知を経た21ヶ月児では、混乱や逆志向が増え、その混乱や逆志向は男児より女児に多かった。子どもが性別選択行動を示す内側には、願望と葛藤が存在していることが推察された。
- 6) これは決して決定的なものであるとはしていない。「(1)子どもの生得的な素質がかなり異常である場合、および(2)経験的環境が「普通に期待できるもの」以上に、ストレスが多く、常に下位段階特有の発達を妨げる場合においてのみ真実である」(Mahler, 1975)。

引用・参考文献

- Allport, G. W. 1961 *Pattern and growth in personality*. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- バウアー, T. G. R. 岡本夏木他(訳) 1980 乳児期 可能性を生きる ミネルヴァ書房 (Bower, T. G. R. 1977 *A Primer of Infant Development* W. H. Freeman and Company San Francisco and London.)
- Bower, T. G. R. 1989 *THE RATIONAL I·N·F·A·N·T Learning in infancy* W. H. Freeman and Company New York.
- Bruch, H. 1973 *Eating Disorders. Obesity, Anorexia Nervosa, and the Person Within*. Basic Books, Inc. New York.
- ブルック H. 岡部祥平・溝口純二(訳) 1979 思春期やせ症の謎——ゴールデンゲージ—— 星和書店 (Bruch, H. 1978 *The Golden Cage. The Enigma of Anorexia Nervosa*. Harvard University Press. Cambridge, Massachusetts.)
- チョドロウ N. J. 大塚光子・大内管子(訳) 1981 母親業の再生産 新曜社 (Chodorow, N. J. 1978 *The Reproduction of Mothering*. University of California Press. California.)
- 生野照子 1994 摂食障害にみる小児期の発達的問題 精神療法 20(5) 400-408.
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- 河合隼雄 1985 (玉谷直美著) 女性の心の成熟 序文 創元社
- Kernberg, O. F. 1972 Early ego integration and object relations. *Annals of the NY Academy of Sciences* 193 233-247.
- カーンバーグ O. F. 他 松浪克文・福本修(訳) 1993 境界例の力動的な精神療法 金剛出版 (Kernberg O. F., Selzer M. A., Koenigsberg H. W., Carr A. C., Appelbaum A. H. 1989 *Psychodynamic Psychotherapy of Borderline Patients*.)
- 久野晶子 1996 1-2歳児のgender identity形成 日本発達心理学会第7回発表論文集 p. 30
- Lewis, M. & Brooks, J. 1975 *Infant Perception: From Sensation to Cognition*. Academic Press. 101-148.
- マーラー M. S. 高橋雅士他(訳) 1981 乳幼児の心理的誕生——母子共生と個体化—— 黎明書房 (Mahler, M. S.: Pine, F., and Bergman, A. 1975 *The Psychological Birth of the Human Infant*. Basic Books.)
- 南 憲司 1977 幼児における性役割の習得過程——幼児期前期にみられる性差と性役割の習得過程におけるモデルの問題—— 京都大学教育学部紀要 XXIII 222-233.
- 西園マーハ文 1994 発達と摂食障害に関する諸外国の理論の展望 精神療法 20(5) 392-399.
- 小此木啓吾・及川 卓 1981 性別同一性障害 gender identity disorder 現代精神医学体系 8 中山書店 233-273.
- 小此木啓吾 1990 精神分析ノート10 ラプロシュマン 再接近期の危機 イマージ 1(10) 青土社 30-38.

- 斎藤久美子 1983 性アイデンティティ 精神の科学5 岩波書店 175-220.
- 斎藤久美子 1990 青年期後期と若い成人期——女性を中心に—— 臨床心理学大系3 ライフサイクル 金子書房 163-176.
- 斎藤久美子 1993 ジェンダー・アイデンティティの初期形成と「再接近期危機」性差 精神分析研究 37(1) 41-51.
- スターン D. N. 小此木啓吾・丸田俊彦(監訳) 1989 乳児の対人世界 理論編 岩崎学術出版社 (Stern, D. N. 1985 The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. Basic Books.)
- Sugarman, A., Quinlan, D., Devenis, L. et al. 1982 Anorexia nervosa as a defense against anaclitic depression. International Journal of Eating Disorders. 1 44-61.
- 百合本仁子 1981 一歳児における鏡像の自己認知の発達 教育心理学研究 29(3) 261-266.

(博士後期課程)